

## 国際化時代の日本語作家たち

涌井 隆

2005年の公開講座は「日本像を探る：外から見た日本・内から見た日本」というテーマで行われ、私はリービ英雄とノーマ・フィールドという1940年代生まれの現在活躍中の作家について話したが今回論文集に投稿するにあたって視野を広げて、「国際化時代の日本語作家たち」というテーマで現在の日本語文学の状況をまとめてみたい。日本文学ではなくて日本語文学と書くのは「日本語文学」と言うと作家が日本人であると取られかねないからだ。言うまでもないが、最近は日本語を書く外国人も多くなってきたので国籍にかかわらず日本語で書かれておれば日本語文学と呼べば混乱が生じない。金石範は2005年10月28日発行の「週間読書人」の対談で在日朝鮮人文学は日本文学ではなく日本語文学だと主張している。私もそれにならうことにする。もちろん日本人が日本語で書けば日本語文学となり問題がない。

作家が日本について内や外から見て書くと聞いて、すぐ思い浮かぶのは、日本人が日本の中において日本について書くというのではない場合である。日本にいる日本人が日本について書くのは特別なことでもなんでもない。日本人が外に出て日本について書いたり、外国人が、日本の内からあるいは外から日本について書いたりすれば、少し特別なこととなる。距離が生まれるから、目新しい視点があるのではないかと期待を持たせる。日本人の自己像について考えると、明治以前は日本あるいは日本人が自分を映す鏡は主に中国だった。明治以降は主に西洋、戦後はとりわけ軍事的に占領したアメリカを常に意識し、自己像を作り上げてきたと言える。西洋と比べ遅れた日本を批判する作家知識人が出てくると、それに反発して、国粹的になる作家知識人も出た。一方、日本について書く外国人作家は、自分の文化にない優れた点を持つ日本を礼賛する

人が出ると思えば、長期にわたって在住して様々な不都合に遭遇し批判的な文章を発表する人も現れた。そのような外国人作家を読む日本人は取捨選択して自分の都合のいいように受け入れた。いづれにせよ、「日本像」は内からのものであれ外からのものであれ、日本人のものであれ外国人のものであれ、鮮明な価値判断を伴うことが多かったと言える。

ただ、最近その傾向が薄れてきた。物事は理解が深まれば深まるほど白黒をつけ難くなるという事実があり、「日本」と言ってもその存在は巨大で個人はその小さな側面しか知りえないという事実がある。異文化交流が深まるにつれて、お互いの情報も増え、あばたもえくぼ的な誤解が少なくなってくる。それでもイデオログは存在し続け、物事をすっきりくっきりと提示してくれるので、彼らの言説に煽られる読者も出てくるが、第二次世界大戦のような世界戦争が繰り返されるとは想像しにくい。その理由は、日本を含めた主要国の間での相互理解と相互依存が深まっているからだと考えられる。毎年お盆や正月の時期になると日本を離れる観光客で主要国際空港は混雑する。今後その数は増えこそすれ減ることはない。サラリーマンの海外出張も増え、英語の運用能力が多くの企業で採用と昇進の必要条件と考えられるまでになっている。いわゆるエリート達は昔から世界とつながっていたが、最近は普通の人達にとっても海外が身近になった。街でみかける外国人の数も年々増えている。いわゆる「国際化」と呼ばれる現象である。インターネットが電気やガスのような基本インフラに限りなく近づき、モンゴル人が史上最強の横綱になった。国と国との垣根が低くなり、内と外の区別がどんどん不明瞭になっている。国際化は疑問の余地がないように見える。

ただ、日本で80年代から頻繁に耳にするようになった「国際化」という用語は実はかなりあいまいであるし、世界的に流通しているわけではない。もう一つ、現在進行中の大きな流れをさす言葉として「globalization, グローバル化」という表現があり、社会学者が厳密に定義して使っている。だが、その「グローバル化」という概念も学術を離れた一般メディアに入ると「国際化」と同義語のように使われているようだ。日本語の「国際化」という言葉には、明治時代の「富国強兵」のようなスローガンのような響きがある。つまり、世界に遅れを取るなという掛け声であり、言い換えればその前提に日本が遅れているという認識がある。そういう日本人の世界に対する態度は、「国際化」した今も昔もそれほど変わっていないのかもしれないと考えると面白い。下に論ずるリービ英

雄はそれを日本の島国根性と呼んでいる。(彼は対照的に米国や中国を「大陸」と呼ぶ。その違いは島国は外が気になって仕方がないが、大陸は自分が世界の中心だと思っている。)

興味深いことに、専門の社会学者には、グローバル化は誇張されていると主張する人もいる。少々データが古いが、経済学者のグラハム・トンプソンは、商品貿易(輸入と輸出の合計)のGDP比率を、前世紀の初頭から、最後の十年まで数字で示し、殆ど変化がないと結論づけている。日本の場合1913年に31.4%だったのが、1973年は18.3%、1995年は14.1%なので逆に減っている(p.101)。GDP比率で見たG7諸国の資本移動も、1870年から1990年代後半まで2%から6%の間を行ったり来たりしているだけで、最近のグローバル化によって特別大きな変化が起こっているわけではない(p.120)。このように明解な数字で示されると、実感に基づいて反論することは難しい。しかし、日本における最近の「国際化」が一般日本人に強烈に受け止められているとしても、明治初期や戦後10年ほどの間の「国際化」の方が、比較にならないほど、衝撃的であったろうと容易に想像できる。あの頃の日本は、今日のアフガニスタンやイラクの状況に匹敵するほどの大動乱期だった。外から商品、通貨だけでなく、人も大量に治外法権を主張して入ってきたのだから。したがって、今日日本で進行している、「国際化」は平時の緩やかなものであるのは間違いない。しかし、将来にわたって持続し、後戻りの出来ないもので、日本だけではなく、世界全体を巻き込んでいる運動であると一般の人に理解されている。というか感じ取られている。トンプソンは過去の統計を取って、現在はこうであり、過去とそれほど変わりがないと主張するが、未来については語らない。経済学者の将来予測がしばしば外れるという経験則を自覚しているというより、長期的に見れば似たような現象が繰り返されるという科学的認識に基づいて論じているのだと考えられる。

2005年は日本の国際化という意味では特筆すべき年であったと言える。ひとつ象徴的な出来事を挙げよう。ボビー・バレンタインという大リーグでもよく知られた監督のことである。彼は2001年に大リーグのニューヨークメッツをワールドシリーズに導いた名監督で、その後成績不振で解雇されるのだが、結局2005年に10年ぶりの古巣のロッテマリーンズに戻ることになり、日本シリーズで優勝しただけでなく、その後開催されたアジアシリーズでも勝ってしまった。マリーンズとの契約は1年だったので、名門LAドジャーズが彼を獲得しようとして魅力的な契約を提示したが、結局彼は複数年の契約更新を得てロッ

テに残ることになった。「本場アメリカ」の名監督が名門チームの誘いを断って日本のプロ野球チームの監督をするというのは10年前には想像も出来なかったことだ。彼の決断の理由はロッテとの契約が極めて魅力的なものであったから（大リーグの監督で一番高給取りであるヤンキーズのトリー監督の年俸400万ドルに匹敵すると報じられた）というのが大きい。ゲームのレベルがマイナーリーグ並みであれば幾らお金のためとは言え日本に残らなかったろう。日本のプロ野球のレベルが上がり日米の差がそれほど大きくなって来たから監督として十分やりがいがあるのだろう。勿論、優勝してすぐアメリカに帰るのは千葉のファンが許さないだろうとか、アメリカのスポーツメディアに叩かれる（メッツを解雇された時期はひどかった。その後もメッツは結局誰が監督しても駄目なチームであり続けている）より、日本のスポーツメディアに賞賛される方が気分がいいなどの理由も考えられるが、やはり一番大きいのは、監督としての仕事場として日米の差がそれほど大きくなって来たというのが最大の理由であろう。つまり、国との垣根が低くなり平板化されているということだ。さらに彼が日本の野球界に位置を持つとするのは、WBC(野球におけるサッカーの世界カップのようなもの)の将来を見据えてのことであるのは明白だ。文化間の交流を妨げるものとして言語がよく取りざたされるが、野球の監督をするのに言葉が流暢である必要はない。

ポビー・バレンタインと似たような例を文芸界に求めると、鈴木光司と村上春樹が思い浮かぶ。鈴木光司は90年代の前半に『りんぐ』『らせん』というホラー小説でベストセラー作家となり、その後日本で映画・テレビ化されてヒットし、2002年にはハリウッドスタジオのドリームワークス社が『りんぐ』のリメイクを作り興行的に大成功を収めた。村上春樹の小説は映画化されてはいないが幾多の言語に翻訳され世界的に広く読まれている。谷崎や川端は世界文学の古典として日本の外でもよく知られているが、現在活躍している日本人作家で世界的に知名度が高い人を挙げるとするとこの二人が挙げられるだろう。彼らはたまたま大学で文学を専攻したので、フランス語や英語が出来るが、国境を越えて受け入れられているのは、彼らの作品に見られる無国籍性である。ホラー小説の怖さの本質は万国共通のものであるし、村上春樹の小説の登場人物はある程度豊かな国の都市生活者であり、その舞台は固有名詞を剥ぎ取られているので東京であれ、ニューヨークであれ、ソウルであれ、北京であれ、違和感なしに受け入れられる。文学は言葉によって成り立つ芸術であるが、彼らの文

学はもともと日本語という言語にそれほど依存していない。優秀な翻訳者が得られれば国境を容易く越えるので、世界戦略を持つ出版社が次作の世界的成功を睨んで翻訳者を雇い同時に共同作業をさせてもおかしくない(『ハリー・ポッター』のようなメガベストセラーではそれに近い。)

出版の世界ではまだ珍しいが、映画の世界では国際共同制作は何も珍しくはない。映画制作は投資規模が大きいので市場を世界に求めようとするのは自然の成り行きであり、それゆえ自動車や家電などの製造業と似てくる。ハリウッドの巨大スタジオは世界に売れる物語を世界のどこからでも仕入れて映画に仕立て世界に売る。鈴木光司の作品を買ったドリームワークスはフランスのベストセラー作家 Marc Levy の小説を基にして 2005 年に *Just Like Heaven* というヒット作を作り出した。同年の暮れには、『シカゴ』(2002) で有名なロブ・マーシャルが、中国と日本の有名な俳優を集めて、日本の芸者を主人公にしたアメリカ小説 (*Memoirs of a Geisha*) に基づいた映画をソニーの製作でつくり日米同時公開を果たした。公開前には主要俳優に中国人を起用したことについて批評家の間で賛否両論があったが、公開後一ヶ月以上経った今、かつての議論が一般観客の間で再沸騰したとは聞いていない。日本人が見れば、カリフォルニア州のセットが再現する祇園に少々違和感が残るのは確かだが、それほど目くじらを立てるほどのことはないと言われている。観客は感じているのだろう。地質学者ナウマンに日本を誤解されたと思ひ込み戦闘的な論争を始めた森鷗外の時代から百年以上経ち日本も世界も大きく変わった観がある。

鈴木光司と村上春樹は世界に向けて日本を代表することを好まないし、自分が日本人であることは偶然であると考えているようだ。JapanReview.net のインタビューで鈴木は日本文学について訊かれて何も推薦するものがないと答えている。その反面アメリカ文学やフランス文学はよく読んでいるらしい。村上春樹はベストセラー作家になってから、イタリア、トルコ、米国などを転々とし、在米中にはアメリカ永住して英語で書くよう勧められたと『やがて悲しき外国語』で明かしている。自分が日本語で表現することを模索し続けてきてそれなりに習熟してきたので表現言語は日本語以外には考えられず永住する場所は日本以外にないと書くが、彼の描く世界は彼の好きな西洋音楽やジャズで満たされている。

日本語を使っているとしても容易に英語などの外国語に翻訳できる「世界語」で書いていると言ってよい鈴木光司や村上春樹と対照的なのが、リービ英雄と

多和田葉子である。彼らも「国際化」された日本にふさわしい作家達であるが、個別の表現言語にこだわりを持つ。リービ英雄はアメリカ人で母語の英語ではなく日本語で書くことを選び日本に住んでいる。同様に多和田葉子は日本人ではあるが、日本語だけでなくドイツ語でも書き、ハンブルグに住んでいる。両者は表現言語を強制されたのではなく自分で選び取ったという点で似ている。さらに、鈴木光司や村上春樹などと違ってベストセラー作家ではなく、読者の数が限られているという点でも似ている。日本の作家は村上春樹のように日本に居ながら日本語で執筆しても世界のベストセラー作家になれるし、多和田葉子のように外国に行ってその外国で限られた数の読者を得ることも出来る。それが内と外の不明瞭な国際化の一つの姿である。

リービ英雄の小説はすべて短編か中篇で自伝的色彩が濃い。日本近代の由緒ある私小説の伝統を英語を母語とする作家が受け継いでいるという印象を与える。60年代後半を扱った彼の処女作である『星条旗の聞こえない部屋』はベン・アイザックというユダヤ系アメリカ人の高校生が主人公で、カトリックの前妻を離婚して中国人と結婚した外交官である父と横浜領事館に住んでいるが、その家庭になじめない。とは言え、反米のデモを続ける日本人学生を見下しているアメリカ人学生や英会話の練習相手に彼を使おうとする英語の流暢な日本人とも打ち解けることができない。結局友達になれたのは三島由紀夫や吉本隆明について語る四畳半の住人安藤だけで、ベンはその下宿に居候すべく家出する。三島についての言及があったり、ベンが安藤の学生服を着て日本人になりたいと夢想する場面があるところから、同性愛が暗示されているのかもしれないが、明示されない。この家出物語は、その頃解放区の様を呈していた新宿に日本全国から集まってくる家出少年少女たちとベンを重ね合わせる。彼の家出は世界的な規模を持つ。彼は父の新しい家庭から疎外され、父がカトリック教徒と結婚したという理由で勘当されたのでユダヤ系の祖母祖父に疎んじられ、母は離婚の精神的打撃からか神経症にかかっている。日本の左翼学生にベトナム戦争やパレスチナ問題についてアメリカ人やユダヤ人として弁明させられても、自分はアメリカが嫌いだし、イスラエルにも興味がないとしか答えられない。どこにも場所を見つけることが出来ず、どの国にも忠誠を誓えない。そんな彼は日本人の友人を通じて日本語と日本人に同化しようとする。リービはこの作品は日本語でしか書き得なかったと弁明しているが、その言葉にうそはないだろう。逆説的に聞こえるかもしれないが、私小説の伝統が深く強い日本語で書

いたからこそこのような小説が生まれたのだとも言える。リービは英語では書けなかったと書いているが、もし英語で書いたとするならば全く別の小説になっていただろう。

多和田葉子のドイツ語作家としての力量についてはドイツ語が出来ないので何も書けない。ただ、ドイツ語作家としてドイツ社会に根を下ろしている日本人作家であるという事実だけで彼女の特異性が浮かび上がる。日本文学の歴史を遡っても彼女のような存在は稀であるし、また同時に、リービ英雄が日本語作家として日本に根を下ろしているアメリカ人作家であるという点で特異であるのと似ている。旧英国植民地出身の作家が英語で表現活動を行い世界的に知られるようになるというのは、そのような状況が出現し始めた頃は目新しかったが、今では別に不思議でも何でもない。多和田やリービのような出稼ぎ移民でも何でもない人がドイツや日本にやってきてその国の言葉で作家活動を始めて成功するというのはグローバル化された世界でもまだ稀な出来事に属する。多和田の小説は子供のいたずら心に満ちた童話っぽさや、性をほのめかす超現実性や、言葉遊びに戯れる遊び心などが入り混じった興味深い世界を作っている。それは決してベストセラーになるような類のものではなく、通常「実験的」と呼ばれるものであるが、ドイツの文芸市場で小さなニッチを開拓しているのだろうとドイツ語が読めなくても容易に想像できる。多和田はまた、自分の母語である日本語と第二言語であるドイツ語の間のずれから新しい表現が生まれるという点を強調する。『エクソフォニー：母語の外へ出る旅』の中で次のように書いている。「それにわたしはたくさんの言語を学習するというということ自体にはそれほど興味がない。言葉そのものよりも二ヶ国語の間の狭間そのものが大切であるような気がする。わたしはA語でもB語でも書く作家になりたいのではなく、むしろA語とB語の間に、詩的な峡谷を見つけて落ちて行きたいのかもしれない。」(p.31)。同じことはリービ英雄にも言える。彼の小説作品はそれほど詩的でもないし、私小説的であるという意味で多和田の作品とは大きく異なっているが、例えば、「千々にくだけで」という短編小説の主人公エドワードの内的独白は常に日本語と英語の間を行き来している。作家のリービと多和田は日常生活においても二つの言語の間の狭間を常に感じながら言葉を使っているのだろうと想像できる。

上に、日本語文学の国際化を代表する作家として、鈴木光司と村上春樹、また別の角度からリービ英雄と多和田葉子を取り上げたが、もうひとつ忘れては

ならない作家として柳美里（ユウミリ）と梁石日（ヤンソギル）を挙げたい。この二人は小説作品がベストセラーになったというだけでなく、幾つか映画化されているのでファン層は厚い。日本人の中に広く読者を持つ在日朝鮮人作家のさきがけと言える。

在日朝鮮人（韓国人）の日本語作家達は長い間「日本文学」の片隅に押し込められてきた。「日本文学全集」などには収録されることはないが、「昭和文学全集」などには収録されるという事実は日本に置ける彼らのあいまいな地位を雄弁に物語っている。しかし、そのような作家の「国籍」をめぐるわだかまりは、外から押し寄せる日本の国際化によってなし崩しに薄まっていく。例えば、優良大企業が外国に出ると当然外国人を雇うことになるが、それまで日本国内で可能な限り在日朝鮮人を雇用しないという方針を取ってきたことと矛盾してしまう。在日朝鮮人達が裁判を通して差別と闘ってきた歴史は無視できないが、80年代以降の日本企業の国際化によって西欧先進国（特に米国）の信用を損なわないように日本が変らざるを得なかったという側面も無視できない。その結果在日の人達の日本社会の主流であるサラリーマン中流社会への進出が進み、徐々に国際化していく日本人の差別感情の薄まりとあいまって、彼らの日本社会への同化を促進したと言える。もちろん、日本の国籍法が血統主義を取るかぎり、その同化は「コリアンジャパニーズ」の出現を意味してはいないが、意識の上では日本人と変らない在日朝鮮人が増えて来ているのは間違いない。

90年代後半から柳美里（ユウミリ）や梁石日（ヤンソギル）らが、ベストセラー作家になったのはこのような日本の国際化と無関係ではあり得ない。彼ら以前にも、金史良、金達寿、李恢成、金石範、金時鐘、李良枝など数多い優れた才能が輩出したが、日本人の中にはそれほど多くの読者を獲得できなかった。その理由は、単に在日朝鮮人の文化・政治的帰属をめぐる物語が日本人に共感を起こさなかったということなのだろうが、言い換えれば、日本人の国際化が十分でなく、在日朝鮮人作家達が持っていた問題意識を共有する想像力に欠けていたと言う事もできる。しかし、日本人は確実に変わってきており、2005年12月31日の朝日新聞によると2004年度の日本人の新婚の15組に1組が国際結婚であったということであるから、異文化を身をもって体験する人が増えている。つまり、内なる外国人である在日朝鮮人達の体験が他人事ではないと感じる日本人が増えているということである。

柳美里は劇団出身でもともとは俳優だったが、劇の台本を書くようになり、

次第に小説に移行した。彼女の作品を際立たせているのは、家庭内暴力や学校でのいじめなど壮絶な自伝的詳細を赤裸々に語る語りそのものである。登場人物が実名で出てくるから自伝と解釈することも可能であるが、本当に自伝であればこんなことまで書いてしまうだろうかと疑問に感じる記述に出くわすと、読者はその虚構性について考えざるを得ない。回想には虚構が入り込まざるを得ないという説明では不十分で、事実であれ虚構であれ、何故作者はそこまで書いてしまうのか隠しておいてもいいのにと感慨を持たされてしまう。遠い昔の話ではなく、最近の出来事を題材にした小説になると、作家柳美里が崖っぷちに自分を追いやることで作品をぎりぎり成立させているのが明らかで、読者はサスペンススリラーどころではないはらはらどきどき感を体験する。ベストセラーになり映画化された『命』はそのような作品である。

柳はある既婚の男と関係し彼の子供を生むことを決断するが、その日本人は認知を渋る。日本で生まれ日本語しか出来ないのに柳は韓国人であるため、日本人の恋人が子を認知しないかぎりその子は日本国籍を取得できない。柳は自分は子供に日本語でしか語りかけることが出来ないのだから、日本国籍を当然視しているが、日本の国籍法は彼女のような事例を想定していない。ただ、子供を生んでも育てながら執筆活動を続けられないので、十代から二十代にかけて長期にわたって同棲したかつての恋人の東由多加に助けを求める。彼は癌で余命幾ばくもないが、赤ちゃんのおしめを替えたり風呂に入れたりすることぐらいは出来る。柳と東は赤ちゃんを育てるために一緒に住み始める。結婚している夫婦の間に子供が生まれるというのが標準的な家族の姿であるとするれば、この作品に描かれている家族は変則的なものだ。しかし、家族の愛の絆と血縁関係には何の関係もないということはこの物語は教えてくれる。柳は血統主義に基づいた日本の国籍法を否定も肯定もせず、ただ自分の息子が日本人として育つように父の認知を得るために彼を説得するだけなのだが、属地主義に基づいた国籍法の方を支持するだろうことは読者には明白に思える。

梁石日の小説も自伝的な色彩が濃い。そこで圧倒的な存在感を持っているのは、作者の父で、長編『血と骨』では金俊平という暴力的な巨漢として描かれる。彼はやくざとの果し合いを何度か生き抜いてきて地域社会で恐れられている。朝鮮人部落の政治力を背景にかまぼこ製造で巨万の富を得た後、冷酷非人な金貸し業に転じる。徒党を組まず守銭奴で女は征服して跡取りを産ませる道具としてしか考えていない。この主人公は圧倒的な存在感を持っているが、作

者は超人間的な英雄を作り上げようとしているのではなく、描写は淡々としている。『修羅を生きる』という梁石日の自伝を読むと、そちらの方が壮絶なのであっけに取られるほどである。金俊平を支えているのは、息子達にいくら徹底的に嫌われても最後には男から男に繋がる家系を引き継いでくれるだろうという時代錯誤的な思い込みと、修羅場で頼りになるのは政治力でも頭脳でもなく、金と腕力以外にないという単純明解な思想である。彼は、国籍や冷戦構造に起因するイデオロギー論争とは全く無縁な世界に住んでいる。彼が体現するこのような世界観は 90 年代半ばから長い不況に入った日本に多くの共感を呼び起こした。梁石日の著作の多くは幻冬舎という新興出版会社から出ている。その出版社は借金の取立てややくざなどの闇の世界を扱うフィクションやノンフィクションを多く扱っていて、2003 年にジャスダックに上場しており、売り上げを伸ばしている。正確な数字は分からないが、その株を保有する外国人投資ファンドも存在するはずである。

以上日本語文学の国際化を象徴する三組の六作家を挙げて紹介してみた。それぞれ国際化の異なった三側面を代表している。世界地図を広げると日本語使用者は日本列島に集中しておりその地理的孤立は否定しようがない。しかし、日本の大都市の飛行場からは世界の各地に定期便が出ており国境は穴だけである。中国やヨーロッパやインドのように同じ「国」なのに夜行列車に一晩乗ったらことばが通じなくなるという「大陸」とは状況は異なるが、日本のような「島国」でも事実上垣根が十分に低く簡単に外から越境されている。外も内もない世界が現前している。

## 参考文献

「週間読書人」2005 年 10 月 28 日

梶田孝道 編著 『国際化とアイデンティティ』 ミネルヴァ書房 2001

デヴィッド・フェルド 編著 『グローバル化とは何か』 法律文化社 2000

<http://www.timesonline.co.uk/article/0,,20029-1943341,00.html>

<http://www.asahi.com/life/update/1231/001.html>

[http://japanreview.net/interview\\_Koji\\_Suzuki.htm](http://japanreview.net/interview_Koji_Suzuki.htm)

小堀桂一郎 『若き日の森鷗外』 東大出版会 1969

鈴木光司 『りんぐ』 角川ホラー文庫 2005

- 村上春樹 『やがて哀しき外国語』 講談社 2003  
リービ英雄 『星条旗の聞こえない部屋』 講談社 2004  
リービ英雄 「千々にくだけで」「群像」 2004年9月号  
多和田葉子 『犬婿入り』 講談社 1993  
多和田葉子 『ゴットハルト鉄道』 講談社 2005  
多和田葉子 『エクソフォニー』 岩波書店 2003  
柳美里 『命』 新潮社  
梁石日 『血と骨』 幻冬舎 2004  
梁石日 『修羅を生きる』 幻冬舎 2004